

## 福島・富士山プロジェクトへの誘い（いざない）

さんどう まさる

山藤 賢<sup>1)</sup>、望月泰男<sup>1)</sup>、谷口智也<sup>1)</sup>、生江麻代<sup>1)</sup>、檜山由香里<sup>1)</sup>、香取尚美<sup>1)</sup>、入沢 薫<sup>1)</sup>

戸高雅史<sup>2)</sup>

### 1) 昭和医療技術専門学校、2) 野外学校 FOS

【はじめに】2011年3月東日本大震災より、早や4年が経過した。その印象は、人々の記憶からは、だんだん薄れていく。しかし、現在でもその傷跡は大きく残っており、復興が終わったわけでも支援を必要としなくなったわけでもない。私共の学校及び法人では、一昨年より、放射線濃度が高く、自由に土の上で遊べない子供達のために、福島の子供達を、富士山の世界に連れて行き、体と心を解放するとともに、未来への大きな礎となればというプロジェクトを、野外学校 FOS（代表：戸高雅史氏）と共催で行っている。そして、その場に本校学生、教員も参加し、大きなものを得て帰ってきていると実感している。今年で3年目になるこのプロジェクトが学生や教員に与える効果について報告させていただく。

【対象】2013~14年福島・富士山プロジェクト参加者である、福島の子供達（毎年15名ずつ）、保護者の方5名以上、本校学生を含むボランティア学生20名以上、本校教員及びスタッフ10名以上、FOSスタッフ5名。2泊3日で、山中湖畔、富士山5合目で宿泊。自由な中での自然との繋がり、全員でのご来光登山などを中心に活動を行う。これら全ての費用に関しては、本法人がボランティアとして負担し、福島からの交通費も含め、参加費は無料である。

【考察】震災後3年を機に、大手企業の復興支援は激減した。企業としての注目を集めなくなってきた以上、それは仕方がないことかもしれない。しかし、そのタイミングで、私達は、援助なしでは続けられないプロジェクトを引き継いだ。そもそも学校の役割とはなんであろう。教育を通じて、そこで「学び」を得た学生を社会に還元することであると私は考える。このプロジェクトに参加した学生、また、その良さを学校全体に反映したいと行った、3年生での富士・山中湖キャンプを通じて学生達は大きく成長した。成熟という言葉がふさわしいかもしれない。その結果としての、国家試験の全員合格は、僥倖であるが、本来の我々の愉楽はそこにあるのではない。真の意味での人間形成を臨床検査技師教育の場を通して行うことの意義を、感想なども交えながら紹介させていただく。